
アビリティー・ウェイク

なごみーぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アビリティー・ウエイク

【Nコード】

N9873Z

【作者名】

なごみーぬ

【あらすじ】

人々の生活の中に突如としてあらわれた”能力者”という存在・

・
主人公バレットに関わる様々な能力者、そして組織！
嬉々とした高校生活・・・とはいかないみたいです

中二的なキャラ付けや分かりにくいパロディネタ、口調の酷さ
やセリフ台本書き・・・などありますがそれでも読める人はどうぞ

10話未満程度で完結する（予定）です

どんな意見でも構いません、感想や評価をもらえたら凄くうれし
いです

自身のFC2ブログの方でも記事としてアップしてあります。無
断転載ではありませんのでご了承ください

1話 ウィクトルナンバー（前書き）

ありがちな”能力バトル学園モノ”という題材で書いてみました
キャラクターの区別をつけやすいため、口調などは大げさにしているつもりです

小説を書き始めて日も浅いので厳しい意見や感想など大歓迎です

1話 ウィクトルナンバー

この世界はここ数年でガラリと変わった

何故か

簡単に言つと、能力という奴が世間一般に知れわたるようになったからだ

要は、怪光線や電撃を撃ち放ったり、高速移動やテレポートできたり…

そういう人間が世界各地で増えているようだ

能力を持つ人間は問答無用で優等生…成功者として称えられる存在なのだ

正直、無能力者からしたら羨ましいなんてもんじゃない

…まあ、正直こればかりは運なので仕方がない…よな…

…

くミティオライト高等学校く

時は4月の中旬

生徒たちは入学式も終え新しい校舎、学級にも多少は慣れを覚えつつある頃だろう

そんな中、休み時間を無意義に机に突っ伏して過ごしている

棘々した髪型の男子生徒が1人

名を”バレット・ルージット”

バレット「はあ…」

机に散乱したプリントや教科書に眠そうな視線を送りながらため息をつく

そんなバレットに嬉しそうに近づく女の子が1人

金髪の長髪をなびかせている

名を”エリス・サジテール”

エリス「こらあバレット！お昼休みなんだから外行こ！外」

ふてくされた表情でエリスを睨みつけるバレット

バレット「そんな時間は無えよ、見ろよこのレポートの数」

エリス「ただの宿題じゃん！家でやればいいんじゃないの？」

バレット「今日中」

エリス「ええ…ん、でもそもそもバレットが授業サボったり居眠りしたりするせいじゃないの？」

バレット「うるせーな…良いよなあエリスみたいな能力者様は、宿題はおるか授業すらサボっても単位やら進学には全く無問題」

エリス「私はちゃんと勉強してるよお！」

バレット「今日は午前の授業オールサボりだったじゃねえか」

その言葉に苦笑いしたエリス、だがすぐに自慢気な表情に変わった

エリス「ふふん 今日はこの高校の” ウィクトルナンバー” の第4位を負かしてやったんだよ」

バレット「ウィクトルナンバー？なんだよそれ」

エリス「この高校には三十人近く的能力者が居るらしいのよね！そしてその中で最も強い7人がウィクトルナンバーと呼ばれるらしい
まあ私が4位に勝ったから私が3位！」

バレット「ふーん…」

エリス「という訳で私はこれから1位をぶっ飛ばしてきます！」

そう言うとエリスはくるっと一回転して教室の出口に駆けていった

エリス「あ！私が高校最強ベストワンになった暁には飯を奢ってあげる！！だからこの教室で首を長くして待ってなさい」

バレット「ああ、忘れてなければな」

力なく手を降るバレットに満面の笑みを向け足早に教室から立ち去るエリス

バレット「ていうか…お前4位だろ…まあいいけど」

…

放課後 体育館裏

エリス「ちゃんと果たし状は読んでくれたみたいね！」

「???」はア…時代劇の見すぎじゃねえのか？」

エリス「靴箱に女の子からの手紙なんてドキツとしたんじゃないの？第1位さん？」

「???」「つつか…とりまお前は死にたいってゆう解釈でいいのかわかる？」

エリス「ふふつ、第4位ですらあんなヌルイ高校のベストワンなんて底が知れてると思うけど？」

「???」「4位？4位…あー、なんだっけなあ…アクアパラルだかライオディアスだったか…」

エリス「私もどんな能力者が忘れちゃった、弱すぎて

あなたの能力も覚えてられるか怪しいなあ」

「???」「てかよあ…お前ガチで頭悪いなあ

知ってるかあ？この高校のベスト3のメンバーは二年間ずっと不動なんだぜ？」

第4位以下なんぞ周一ペースで入れ代わってんだよ…

もう分かるよなあ？4位以下と3位以上じゃあ…圧倒的な実力の差があるんだよ…クヒヒヒ」

まるで悪魔のような笑いを浮かべる第1位に若干であるが恐怖を覚えた…

だがそれ以上にエリスは自分が一番強いという自信を持っていた

エリス「ずいぶん喋る口数の多い1位さんね、4位を軽く捻られて焦ってるの？」

???「あ？クヒツ いいねえその溢れる自信良いよ良いね全然オツケー

そのプライド…スタスタにしてやりたいわあ…じゃあそろそろ開戦つてことであ…」

すると1位は片足を何かをしようとしたが、それと同時にエリスは片腕を前に出しそこから閃光弾のようなものを撃ちはなった

これは彼女の

大気中の空気を圧縮して利用できる能力
空気を圧縮し高質量の弾丸を放ったのだ
名を”本命空気（エアロバスター）”

が、確実に第1位へと向かっていったはずの弾丸は右に大きく反れ、近くにあつた花壇をぶち壊した

エリス「やるじゃない！」

間髪入れずにエリスは細かい弾丸を百発ほど放射状に撃ち放つ
攻撃を反らされるなど今まで戦ってきた念力や重量操作の能力者で慣れっこだ

「クヒヒヒ…」

…まるで全ての弾丸が第1位を恐れるようにそれぞれがバラバラに反れていった

鳴り響く爆発音…地面や壁、近くにあった倉庫などはボコボコになったが

第1位は傷ひとつ付いていない

エリス「っ…!？」

「さあ…俺は一体何をしたのかな？」

全く気づけていないアホ面にご褒美です」

第1位は足元の石を踏み砕いた

その瞬間、エリスに激痛が走った

腹部に先程の石の破片が全て刺さっていた

エリスと第1位の距離は15メートルはある。まぐれで破片が全部こつちに飛んできた…とは考えにくい

これは…奴の能力

エリス「念動…力…？」

血が滲む腹部を押さえながら相手の能力の本質を見極めようと試みる

「クヒヒヒ…つか、全然ちげえよ

てかそれじゃ超能力者ってか？そんなダセエ代物じゃあねえよ俺のちからは」

すると第1位は突然エリスの目の前まで迫ってきた

エリス「ひっ…！」

驚くエリスの表情を見て一層笑顔を濃くした第1位は
エリスの腕を掴み上げた

???「クヒヒヒやべえマジで細い腕えやべーよ

ってか無謀な勝負にあっさり負けた敗者にはどんなご褒美を
あげようかなあ？」

エリス「や…やめ…ッ…」

〈1A教室〉

バレット「はあ…もうレポートは無理そうだな…」

積みりに積もったレポートを絶望的な表情で見つめ肩を落とすバ
レット

ふと外野の雑談が聞こえてきた

A「おい聞いたかよ、能力者同士が体育館裏でバトってたってよお」

B「おう、ビックリしたぜ…しかも片方は高校最強だとよ…」

C「どうやら不動のまま相手を打ち負かしたとの事らしいですよ
今頃第1位にいたぶられてるんじゃないですかね」

バレット「…」ガタ

すこしばかり心配になったので例の体育館裏とやらに行ってみる事にした

おぼつかない足取りで「勉強どうしよう」「腹減ったな」などとブツブツ言いつつ歩いていると体育館裏に着いた

とりあえず人が2人居るのが見えた

エリスが血を流して倒れているの…銀髪黒服男子…

バレット「何してんだよ」

気付くと口が開きそう言っていた

???「何って…とりま…」ご褒美タイムってところかなあ?」

バレット「何やってくれてんだ…お前…」

気付くと拳を握り奴を睨み付けていた

エリスはバレットの幼なじみ、いつも無駄ににこやかに振る舞ってそれが今、苦悶の表情で地に伏せている

それがなかなかどうして許せはしないようだ

???「つか、お前はとうゆう能力で俺を全然楽しませてくれんのかなあ?」

バレット「無えよ!能力なんて!」

「は？？」

バレット「むしろ欲しいくらいだ！！」

「はあ…ブツ…なんだよそりゃあ…ククアホかマジで

とりま…マジにひ弱な虫一匹があ…恐ろしい恐ろしい鷹に頭
摘ままれにきたって事でいいんだよなあ」

バレット「さあな、俺にはお前はヒヨコに見えるがな！」

2話 デュアルブート

体育館裏

放課後もとうに過ぎ夜が訪れ始めていた

???「つーかよあ…お前マジに頭悪いなあ…てか、自暴自棄にでもなっちゃってんのかあ？」

脳無しの鼠に俺の名を教えてあげましょう、ありがたいだろ？

俺の名は”デフラグ・ブルーバック”つかお前はこの先一生この名前に怯えて過ごす事になるんだよなあ…可愛そうだわ…」

バレット「名前なんて聞いてねえ！エリスに何をした！」

デフラグ「あ？…あーいや、大丈夫だって！ただ石ころを刺してやつただけさあ

ま…俺の事を一生忘れないように深く切っただけあるがな…
クヒヒヒ」

バレット「つざけんな！この野郎！」

デフラグ「ふざけてんのはてめえだろ…無能力者が最強能力者にケンカ売るなんざギャグにしても笑えねえぞ」

バレット「うつせえ！」バツ

バレットはデフラグに向かって飛びかかった

デフラグ「クヒヒヒ…馬鹿だなあ…」地面から離れて直進する”なんて、マジに”軌道に乗って俺に向かってる”状態じゃねえか」

確かにバレットは確実にデフラグに向かう軌道に乗っていた
しかしながら全く違う方向の壁に追突していた

バレット「ぐはっ！」

左肩をぶつけ反動で地面に叩きつけられた

バレット「お前…何しやがった…」

デフラグ「ああ？ ああ、ま、雑魚には教えても支障無えか

俺の能力は”二色配線くデュアルブーツ” 性質としては”軌道変化能力”って言った方が分かりやすいんだが

俺のデュアルブーツは少しばかり異質な物も関わっているらしいからまあ…本質とは違うわなあ」

バレット「軌道変化…？」

デフラグ「てか…体で理解すれば良いんじゃないのか！？」ドゴオ

疑問の表情を持つバレットに間髪いれず

横にあった体育館倉庫の窓を蹴り割るデフラグ
すると割れたガラスは全てバレットの方へ向かった

バレット「なっ…！」

すかさず飛び退き避ける

…だが避けきれず足に二発ほど食らう

バレット「くっ…要は念力ってわけかよ！ややこしい説明すんな！」

デフラグ「てか念力じゃねーつつてんだろマジで頭大丈夫かお前

俺が放つ攻撃は全てお前へ向かう軌道に向かう

だがお前の攻撃は全て俺へ向かう軌道から追い出されて
当たらねえ…はア…簡単じゃねえか…」

バレット「ぐっ…なら…！！」ダッ

バレットはデフラグに向かって走る

拳を高く振り上げながら…そう、肉弾戦に持ち込む作戦だ

デフラグ「はっはあ！無能力者は接近戦しかできねえわな！」ガキ
ン

更にもう一枚のガラスを割りバレットに向かわせる

バレット「食らうか…！」

素早く横に跳びかわす

すかさずデフラグの頬に一撃、パンチを浴びせる

デフラグ「ぶはっ！」

バレット「その攻撃は”俺の居る場所”に向かってくるだけだろ！
直進しかできないなら避けちまえばなんの意味も無え！
！」

デフラグ「ッざけんなア！！」

殴られた驚きと怒りでぶち切れたデフラグは
懐からナイフと数本のボルトを取りだし投げ
即座にバレットへの軌道に乗せた

バレット「おま…！！うぐっ！」

奇襲とも言えるその攻撃には左手でナイフだけでも庇う事しか出来
なかった

数本のボルトも刺さり左手は完全に負傷した

デフラグ「ッ…！！」

はッ…てかしかなんだアお前、能力攻撃に耐性知識あ
りすぎだろ

無能力者のくせによお」

バレット「こちらら能力者様には恐れ敬いっぱなしなんだよ！

何度欲しいと思ったか…でも俺には知識を付ける事しか
出来ない

だが…お前みたいな能力者には恐れねえ！後輩の女の子
1人いたぶってニヤついて何が最強だよ！！」

デフラグ「つか…なんですかあそのつまんねー理由はア

とりまお前今自分がどうゆう状況下に居るのか理解でき
てんのか？」

すると上着をバツと開き
中から無数のボルトとナイフが姿を見せた

狼狽^{うろた}えるバレットの後ろで呻くような声が聞こえた
怪我で起き上がれない体で、涙と泣き顔でくしゃくしゃな顔で彼女は
は呟く

エリス「逃げて…バレット…私の為に戦わないでよう…」

エリスとバレットは幼稚園からの幼なじみだった
しかし体も弱く、自分勝手にケンカ腰で男勝りなエリスは
色々な所でいじめを受けたり、絡まれたりしていた
そんなとき、いつも助けてくれたのはバレットただ1人だった
ケンカで額から血を流していても、どこを怪我しても、”お前が無
事なら良かった”その台詞と笑顔を何度聞いたことが

エリスにとってそれはコンプレックスになっていた
私をもっと強ければ、バレットは怪我をしないで済む
私がバレットに辛い思いをさせてる、不幸にしている
そんなとき、彼女に能力が宿った
強さを手に入れた、私は最強だ。バレットに守って貰わなくていい
んだ
彼女のコンプレックスは消えた。

はずだった

バレット「お前を見捨てて逃げる…？出来るわけないだろ！！俺が
必ず守ってやる！」

デフラグ「俺が操れるのは単純に”お前を狙う軌道”だけじゃねえ！

”どの方向から”狙うかも精密操作できるんだよ！

クヒヒヒハハア！！全方位から狙われたら流石に避けられねえよなあ！！」

バレット「舐めんな！そんな程度で…」

デフラグ「おいおい…てか照準向いてんのはお前だけじゃねえんだぞ
後ろの馬鹿女もだ！ハハハハア！！」

バレット「なッ…てめえ！！」

やめて、そんな目で見ないで

バレットの目、怖いよ…まるで…自分を犠牲にしても私を…
嫌だ…私の為に戦わないで…

エリス「バレットお！！逃げてよ！！私なんか守らないでよ！！」

バレット「何いつてんだ！！全く聞こえねーぞ！！そんな言葉！！」

デフラグ「いいねえ！！やべーよ！マジで！つか大切なもの！！守
ってみせるよ！！あゝあ！！？」

どうやって守るのが見せてくれよ偽善者さんよオ！

究極の二沢だぜ！？テメーの命か！！女の命か！！どっ
ち守るんだよ！！」

バレット「どっちもだ！！」

デフラグ「はア！？」

バレット「大切な人なら死んでも守りたいさ！！でもな！

死ぬのは間違いないんだ！死んでしまったら大切な人を泣かせてしまう！悲しませてしまう！不幸にしてしまう！！

俺は生きてこいつを守る！！」

エリス「バレット…やだ…嫌…やめてよお…」

デフラグ「……………カッコつけてんじゃねえええ！！」

デフラグは無数のボルトを宙に放った

そして同時にデュアルブートを発動

バレットとエリスを囲むようにボルトとナイフが飛んでいく

そしてエリスの前に立ち塞がり一歩も動かないバレットへと直進していく…

その瞬間

爆発が起きた

砂煙がデフラグに襲ってくる

デフラグ「ああ！？…つか…なんだよこりゃ…ふざけてんのかマジで…！！」

砂煙が晴れ前方に目をやると炎が上がっていた
中にバレットが居る

バレット自身から出るその炎は、まるで盾のようになっていた
ボルトなど全て溶け落ちて消滅していた

デフラグ「は、なるほどなあ、ラッキーだなお前

今この瞬間、能力発現ってわけかよ！」

バレット「これが俺の…」

すると炎はデフラグに向かい直進する

デフラグ「でもなあ！！ラッキーはこれまでだ！炎の軌道が操れないなんて誰が言っただコラア！」

すかさずデュアルブート発動

時速120km 重量96.7kg 距離にして半径10m以内で

あれば操作可能なのだ

炎など簡単に操れるはずなのだ

だがデフラグは気付くと空を見ていた

デフラグ「は…？」

先程の火炎に吹き飛ばされていたのだ
軌道が…変えられない

デフラグ「なッ…んだよ…つか…意味わかんねえぞ…」

発動係数は…元素の乱数調整…こいつの炎には精神的な
感性が加わってんのか？

ダメだ全然理解できねえ！！なんなんだよ！！お前の炎

はよオ！！」

バレット「うるせえ知るか…そんなの！！」ダッ

拳に炎を宿らせデフラグに向かい走り出す

デフラグはもはや一切武器を持っていない

立ち竦^{すく}むしかできない

バレット「うおおおおお！！」

強烈なパンチが真っ正面からデフラグの顔面に当たった
何mか吹き飛び、デフラグの意識は途絶えた

…

数日後

1 A 教室

あの時俺に宿った炎は何故デュアルブートを撃ち破ったのか
それは全く分からないが、エリスは無事だった

あのあとすぐに先生が救急車を呼んでくれたおかげで大事には至ら
なかった

だが…エリスは能力を使えなくなった

能力についての様々な部分は現代の科学では説明されておらず
医師によると”精神的なショック”が原因だそうだ

エリスは心を閉ざし、家族以外とは口を利かなくなった
…勿論、俺とも

これからしばらくは入院して精神面をケアしていくそうだし
しばらくは、会えないだろう

バレット「はあ…」

落ち込みなのか気疲れなのか分からないため息をつく彼にクラスメ
イトが話しかけてくる

ビオランテ「どうしたんだいバレット、その哀しい表情は」

アニーケイ「仕方ないね…エリスが居なくなったもんね…歪みなく
頑張ってよ」

キョシ「ですね…まあ…バレットさんがため息つくのは昔からです
が」

バレット「…ああ」

もうこいつらと、エリスも一緒に馬鹿みたいに騒いで遊ぶ事はない
んだろうか…

俺はあの日…エリスを守っていたつもりだったのに
苦しめてしまったのか？

そう考えてるうちに、ふと涙が一粒だけ落ちた

明日からまた頑張ろう

3話 クラスメイト

雲ひとつない晴天で

5月 春特有のぽかぽか陽気で遊びに出るには持ってこいな休日だ
そんな日に、バレット・ルージットもまたクラスメイトと遊ぶ為待ち合わせしていた

バレット「いい天気だなあ」

などとこれ以上ないほど当たり障りのないセリフを吐き
ふと腕時計を見ると昼の一時丁度だった

すると向こうから女の子の声がする

「おまたせです」

バレット「おう」

彼女はバレットのクラスメイトであり友人である
名を”キヨシ・サンカズヤ”

黒いショートヘアで瞳の大きい美人さんだ

中学の一年生からの友達だ

いつもは休日最低でも3人で出かけるのだが
エリスが欠けてしまった為二人きりなのだ

キヨシ「ごめんなさい、待ちました？」

バレット「あ、いや、今来たところ」

キヨシ「ビオランテくんも誘ったんですけど忙しくてこれないだそうです」

そっちにも連絡来てましたよね？」

バレット「あ…いや、ごめん俺携帯持っていない」

意外な返答に驚きを隠せないキヨシ

キヨシ「ええ！携帯なんて今どき彼女も友達も居ないぼっちさんですら皆持つてますよ！？」

バレット「なんでそんなやつが携帯持つんだよ…」

連絡だったら家に固定電話あるから取れるし」

キヨシ「外出中でも細かい連絡の取り合いとか…とにかく！無いと不便ですよ！」

今からでも契約してきましようよ！携帯！！」

バレット「…めんどくさい」

キヨシ「知ってますか？」善は急げ”ですよ！バレットさんが携帯持っていないなんて嫌ですよ！」

バレットの右手を引っ張り

眉間にしわを寄せ大きな瞳でバレットを見つめながら

唇を尖らせ無理やり”携帯シヨップ”なるものへ連れていった

……

「携帯シヨップ」

店員「はい、では契約完了致しました

ではこちら月額のプランで…通話料金の…」

あっという間に契約は終わり

そして他様々なお得的な要素満載なサービスプランへの勧誘が始まった

何故だかキヨシはしたり顔で嬉しそうだ

キヨシ「何気に私と同じ機種ですねバレットさんっ」

バレット「何気に…って、お前が無理やり…」

「まいいか、腹減ったし飯でも食べに行くかぁ」ガタッ

とりあえず朝から何も食べていないので

店員の勧誘を軽くあしらってさっさと立ち上がる

しかし携帯みたいな小さい機械は全然触った事がないので早く慣れる為に携帯をいじりつつ店を出た

バレット「えと…電話…つってもまだ登録してないか」

キヨシ「じゃ私がアドレスと番号送るので携帯を無線待機モードに

…」

バレット「いや分からんしなにそれ…」

バレットがキヨシに質問しようとした所で

急に背後から男にぶつかられた

はずみで宙に舞った携帯をなんとかキャッチしホッと一息ついた所で辺りを見渡す

「邪魔だつてんだよ！ボウズ！！」

さっきぶつかった男は覆面とサングラス

両手でカバンを抱えて息を荒くして向こうに走っていった

その直後、後ろから少女の声で

「返してえ！！」

声がした方を振り替えると

恐らくあのカバンの持ち主であろう少女が涙目で腰を崩して座り込んでいた

キヨシ「ひったくりですよ！」

バレット「待て！！」

間髪入れず走ってひったくりを追いかけた

後ろからタツクルをかましひったくりはバランスを崩し電柱に激突する

カバンは地面に落ちた

ひったくり「ぐッ…てめえ…ただで済むと…うぐっ…」

鼻を強く打ったひつたくりはうずくまって苦しんでいる

キヨシ「良かったあ…バレットさん怪我はしてませんか？」

バレット「おう、全くあぶねーな…危うく携帯壊れるとこだったぞ

女の子「あ…あの！ありがとうございます！！

な、なんてお礼を、お礼をしたらいいか！

ああの私メイカって言います！」

長めの茶髪をなびかせる少しあどけない口調の彼女
名を”メイカ・ワットスク”

バレット「いや、大丈夫だって

ほら、これお前のだろ？」

カバンを拾いメイカに渡すバレット

メイカ「あ、ありがとうございます！本当に助かりました！

その…あの！三万でいいですか！？」

バレット「は！？」

そう言うとき財布から三万円を取りだしバレットに渡そうとしてきた
お礼を期待したわけではないし、周りからは淀んだ視線が飛んでき
て戸惑う

バレット「いや、いらなから！お金は大切にしろって！」

そんなやりとりをしている間に二人の背後から声がした

キヨシ「きゃっ!？」

先ほどのひったくりがキヨシを捕まえ

ナイフを首もとにあてがっていた

ひったくり「オラお前ら動くんじゃないやねーってんだよ!

女あ!コイツの命がおしけりやそのカバンを寄越しな
ってんだ!」

バレット「お前っ…そんなに女の子のカバンに興味があんのか!」

メイカ「う、え、無理です!渡せませんから!」ダッ

メイカはカバンを持ってあっさり逃げた

その瞬間、彼女のカバンからカードのような物が地面に落ちた

ひったくり「なっ…このやろう!」

慌てるひったくりの肩を誰かがポンと叩く

金髪ショートヘアでのっぺりした顔つきの青年だ

???「おいおいタクリ…アレが奴らに渡りそうとはいえ…

こんな真っ昼間街道ド真ん中で騒ぎ起こしちゃケツから食わ
れちまうぜ?」

タクリ「TKCさん…でも…」

どうやらひったくりの名前はタクリ

謎の男はTKCというらしい

TKC「まっ、女のケツ追いかけるなんざ”コイツ”に任せりゃいいじゃねえか

行け！ジャント！！」

するとTKCの体から紫色の蒸気が出て

やがておぞましい顔をした巨人へと姿を変えた

周りに居た一般人たちはその姿を見るや一目散に逃げていく

バレット「なっ…お前能力者だったのか！何をする気だ！」

タクリ「ちっ…お前らはもういいってんだよ、オラ彼女返してやつからさっさと帰れ」

キヨシ「わっ…」

すると先ほどのひったくりのタクリはキヨシをあっさり返した手荒く放った為、バレットの胸に飛び込む形になった

バレット「おっと、大丈夫かキヨシ？」

キヨシ「あ…はい！それより…なんですかあの巨人！？」

バレット「知らねえ…でもあの女の子を狙ってるってなら放っておけねえな」

TKC「命令はあの女の追跡と取り抑え、さあ行けジャン…ん！？」
ジャント「シユプシャパシエロスシャシャ」

ふとTKCが紫の巨人”ジャント”の方を見ると
頭部が焼けて苦しんでいる

バレット「おい！もういいだろ！あの女の子になんか恨みでもあ
のか！」

TKC「おうおうなんだあ誰かと思えばバレットくんじゃないか、
コイツにケツを掘られなくなきやさつさと去るんだな」

バレット「なんで俺の名前を…！？」

TKC「ありや、随分寂しい事言っなあお前は」

バレット「（…？でもコイツの顔…どこかで見たような…どこで
っけ…）」

タクリ「ちっ…TKCさん、コイツは俺が引き受けますんで、あの
女頼みます」

TKC「おう、頼んだぜ！」

この場をタクリに任せ、TKCは巨人と共にメイカを追いかけた
バレットが止めようとするがタクリの手から放たれた何かに邪魔を
された

バレット「氷…！？」

タクリ「俺の能力は”氷狩”アイスシヨテラー」

空気中の水分を瞬間凍結させ利用できるってんだよ

お前の炎と対になるような力って訳だな…」

バレット「キョシ！離れてろ！」

キヨシ「は、はい！」

キヨシを戦いに巻き込まないように退かせたところでタクリが繰り出してきた

空気中の水分を凍らせ手に余るほどの大きさの氷の塊を三個ほど作りそれをバレットへ向けて飛ばす

バレット「くっ！」

すかさず避け火球を撃ち放つ

しかしタクリは予め左手に氷で作った盾で身を守った

いくら氷が炎で溶ける。とは言っても一瞬激突した程度では消滅する事はない

バレット「お前らはその能力を女の子1人追いかけて回すのに使うのかよ！」

タクリ「お前、わかってんのか、俺は”ウィクトルナンバー”元4位の

タクリ・クビクワレだぞ！」

バレット「知るか！そんな名前！！たかだか4位程度で自慢してくんない！」

そう言うとバレットは先ほどより大きい火球を撃ち放った

しかしまたしても氷の盾で防御された

更にタクリは右手に氷で作った大剣を握った

タクリ「こつちにも事情があんだよ、大人しく退いてはくれねーか
命を捨てたくはないだろ？」

バレット「お前、気付いてないようだから教えてやるよ」

タクリ「！」

バレット「お前の力つてのは空気中の水分を使って武器や攻撃に利用するんだろ

…ならこの短時間でその盾やら大剣なんか作ったら”空
気中の湿気”って奴も沢山奪ってんじゃないのか」

タクリ「な…！」

その瞬間、バレットの周りを巨大な炎が包んだ
湿気が無くなり空気が乾燥し、火力が著しく上昇したのだ
あまりの熱気にタクリの盾や剣は水に変わり消滅した

バレット「はあああ…！」

まるでドラゴンのような巨大な炎が拳から撃ち出され
タクリは吹き飛ばされ壁に激突し気を失った

バレット「ふう…よし、あのTKCとか言う奴を追いかけないと！」

キヨシ「あ…待ってくださいバレットさん！」

これ、彼女がさつき落とした物なんですけど…」

キヨシが見せてきたのはカードのような物で
メイカの顔写真が貼ってあり、学生証のようにも見えたが丸つきり

違う物だった

それには”god ear ゴッドイヤー”という彼女が所属している事務所、機関の名前が書いてあり

様々なコードアドレスや数字が羅列されている中

”人権level 0,25”と書かれていた

その文字にただならぬ気配を感じ、バレットの口角は下がり冷や汗をかいていた

キヨシ「なんか…危なさそうですよ…」

あの女の子とは関わらない方がいいんじゃないか…」

バレット「いや…彼女が何者であっても、現に今巨人に襲われかけてる

俺は助ける、メイ力を」

キヨシ「あはは、バレットさんならそう言うと思ってました。私も付いていっていいですか？」

バレット「ヤバイと思ったらずぐ逃げろよ」

そう言うと2人はメイカが走って行った方向へ同じく走った
ビル街脇の、一通りの少ない細道に2人の影は消えた

4話 ゴッドイヤー

バレットとキヨシは、ひょんなことから出会った少女メイカを救うため

TKCと恐ろしい巨人ジャントを止めるため
ただただ走っていた

しかししばらく走っていると前方に壁三面の行き止まりが見え
同時にTKCとジャント、恐らく気絶してるであろうメイカが倒れていた

TKC「ちい、手遅れって奴か…こりゃケツをやられたな
こんな目立たない場所を待ち合わせに使うとはなあ
奴らにバレたか？俺達の存在が」

バレット「おい！何してんだ！！メイカに何した！」

TKC「おっ！？どうしたバレットこんなところまで！
この女に金でも貸してたのか？」

TKCはジャントを引っ込ませた
どうやら敵意はないようだ…

バレット「なんで俺の名をしってんだ！」

TKC「何故って…お前と俺は同じクラスだろ？」

相手の素性すら何も知らず

どんな答えが返ってくるのかと体を強張^{いぢば}らせていたバレットであったが

意外な答えが返ってきたものだから、一瞬まぬけな顔をしてしまった

TKC「まあ俺は入学式以来はクラスにあまり顔見せてなかったから仕方ないか

それより聞いたぜ？バレットよう、お前高校の第1位をー捻^{ひね}りしたらしいじゃないか」

バレット「なんでそれを…」

TKC「だがどうしてお前は1位の座を欲しがらない？

ウィクトルナンバーのリストを見てもランクは一切変わってなかったぞ？」

バレット「興味ないんだよそんなのは…あんまり目立ちたくもないしな

俺の話はいいからお前らの事を教えろよ

一体何をしてるんだ」

TKC「世界を守る為…なんて言ったら笑うか？」

バレット「なんだと？」

TKC「見ろ、彼女、カバンを持っていないだろう

彼女はとある組織の下請けとして働かされていたんだろうカバンにはきつと運搬する極秘資材でも入ってたんだらう

ぜ」

バレット「じゃあ…なんだってメイカは気絶してるんだよ」

TKC「運搬の最終作業は幹部の役目だ

下請けは皆幹部以上の顔を知らないし知る事は許されない
スタンガンやらなんやらでケツをやられて気絶させられた
んだろっ…」

キヨシ「…なんで彼女はそんな事をさせられてるんですか…」

TKC「簡単に言っと…」

キヨシからの質問に親切に簡潔に説明しようとしたTKCだったが
自分を覗いたメイカ、バレット、キヨシ以外の人間の気配が向こう
からしたのだ

とは言ってもここは壁三面を囲われた薄暗い道
人が入ってくるのは後ろの道しかないのだが

???「彼女が何故下請けなどに属してるのか、それは、救われた
子羊であるから」

キヨシ「子羊…?」

バレット「誰だお前」

???「私は誰か、ならば言おう私はこの世界の恵まれぬ人間を救
える神だ

何故か、それは私の能力が神の右腕と言えるからだ」

TKC「はっ…よく言っぜ…しっかし悪徳組織の総括が顔見せとは
…一体なんの風の吹き回しかな?」

バレット「な、なんだよ知り合いか？」

TKC「いやあ、こいつはなかなかの有名なでな

名前は” ロッシ・ヒークローズ”

表は” 国境無き医師団” だの言われてる団体のトップなわけなんだが

裏は様々な悪徳金融や秘密機関のエーススポンサーって所だな」

ロッシ「だが私の功績はその細かな悪事をはね除ける程素晴らしい、それは何故か

君らは知っているかね、目にしたことがあるか？何を

恵まれぬ不運に苛まれた^{さいな}哀れな人間をオ

目が見えず、耳が聞こえない、顔が爛れ^{ただ}、腕脚が無い、身体が動かない

様々な不運を引いてしまった彼らに、私は救いを与えられるう、一体何で

無論、この能力”^{ヒールンジュリイ}等価的治癒” でな」

バレット「な、なんだ？よく分からないけど良い事してるじゃないか」

TKC「ああ、奴の能力は治癒系能力の中では最も効果の高い部類だろう…

発動条件さえマトモなら俺もこいつには関わらないんだけどな」

キヨシ「発動条件…って、なんですか？」

TKC「誰かの不自由を無くすのに、他の人間の自由が必要…って

ところかな」

ロツシ「その点については、私が説明しよう！何故か
もうここまで知られているのでは生かして帰す事は無いの
であ

私の能力はクセがあつてな

回復力を得るには誰か別の人間の犠牲が必要なんだ

誰かの視力を奪って初めて、別の誰かの視力を治せる訳だあ
私の組織”ゴッドイヤー”に下請けとして居る人間は皆、

私が不自由から救ってやった者なのだ

そこに居るメイカもかつては目が見えないいたいけな子羊
だったのだ

彼らは如何に過酷で危険な仕事を任せようと嫌がりはし
ない、何故か

それ以上に、幸福となれた喜びが大きく！そして再び不自由
な身となる現実に戻るのが怖い！！

私は思う！何を、希望と絶望の絶妙なバランスこそが！！
人間に与えられる最大の幸福なのだ！！」

キヨシ「…メイカさんの、目が見えない…？」

TKC「人を弄^{もてあそ}んで何が幸福だ、このケツ野郎が…ジャント！出番
だ！」

するとTKCは紫の巨人ジャントを呼び出した

TKC「あのケツ野郎を死なない程度にぶっ飛ばしてやれ！」

ジャントは命令のままロツシに向かって巨体をズンズンと前に向か
わせ

拳を振るった

だがその瞬間、ジャントは真後ろに吹き飛んだ

TKC「!？」

ロツシ「やれやれ…組織も物騒な物を作り出した物だな…何を

空气中の水分を凝縮し瞬間膨張による衝撃波を撃ち出す武器を…」

彼等が戦いを繰り広げる中、気絶していたメイカは目を覚ました

メイカ「うーん…こ、ここは…？」

キヨシ「あっ！メイカさん、大丈夫ですか？」

メイカ「あ、はい、私は大丈夫…」

周りの状況を認識するより先に

ロツシの声が耳に響いた

ロツシ「運搬が完了した今、そのメイカという女も最早不要！！
何故か

道中で君らのような屑と戯^{たわむ}れられてるようでは困るのだよ
…ゆえに

今後の仕事はまかせられん…」

メイカ「そ、そんな…私また暗闇に…」

キョシ「そんなこと無いですよ！」

見てくださいよ、バレットさんは、メイカさんを助けるためにここまで来たんです

能力者に襲われても、怖い巨人に会っても

それでもメイカさんを助けに来る人が居るんですよ？暗闇なんて、あるわけないじゃないですか！」

メイカ「バ、バレット…さんが…」

二人はうち解け合い　メイカの顔にも笑顔が見えた

一方、バレットの炎、ジャントの格闘攻撃

ロツシはそのどちらも先程の”武具”で無効化していた
どころか、段々と距離を詰められて行き

背後は壁となっていく…

ロツシ「たかが水分の爆発と侮つてはいけないぞ？何故か

それはコイツには充分な殺傷能力があるからだあ。それ故に
誰から死にたいか選びたまえ…」

TKC「…ちい…ジャントも体力が限界だ…」

バレット「くっそ…ふざけんな！」

やけになりバレットは大きな火炎を撃ち出す

ロツシ「ハハハハ！無駄だとわかって…ん！？」

再び”武具”を使用しようとしたロツシであったが
何故だか作動しなかった

ロツシ「なにっ…!？」

そして炎を食らいのけ反るロツシ

体勢を立て直すより先にTKCが凄い速さで迫り
そのまま胸板辺りに強烈な蹴りをお見舞いした

ロツシ「ぐああああ!!」

真後ろに吹き飛び気絶した
その背後で声がした

タクリ「うわっ、危ないってんだよ」

バレット「お前は…!!」

TKC「おうタクリ、さっきは助かったぜ。小細工をどうも」

バレット「え？何が？」

TKC「要はロツシのケツ、つまり背後から空気中の水分ってやつ
を奪ったわけだな

あんな小道具よりはタクリの方が水分を使うからな」

バレット「無駄遣いのプロか」

タクリ「黙ってる」

TKC「まあいいさホラ、それより彼女の保護だ

それとバレット、お前にはちょっと付き合っ
て貰いたいいんだがいいか？」

バレット「あ、ああいいぜ」

その後彼らは人気の無い裏道を脱出した

ロツシという男はTKCがとある上層の警察に差し渡すそうだが、
やがてあの組織も総括を失い風化して解体されるだろうとのこと

メイカはと言うともう安全であるから家に帰そうとしたんだが「
みなさんの役にたたいんです！手伝わせてください！」と言い付
いてきて

キヨシは「私も付いていきますね」となんの躊躇^{ためら}いもなく普通に付
いてきた

結局全員でTKC達の居るとあるグループに入ることになったのだ

バレット「って！なんで勝手にお前らの仲間になれてんだよ！！」

TKC「いいじゃないか、俺たちはあらゆる事件を解決する能力者
軍団ってわけさ

うーん、まあ今は他のメンバーは席をはずしてるがな」

タクリ「まあコイツが仲間になればそこそこ戦力が充実しますしね」

TKC「ああ、俺は氷の能力者って言うから冷静な奴かと思ってエ
ースに任命したんだが

まさか手柄を急いで公衆の面前で引つたくりするようなケ
ツだとは思わなかったぜ」

タクリ「うつ…」

TKC「よって、バレット！お前が今日から俺たちチームのエースだ！」

キヨシ「すごいじゃないですか！」

メイカ「え、エースと言えば凄く偉いですよ！」

バレット「あ…はい」

TKC「さあメンバーも増えたし明日から大忙しだな！」

新たに加わったメンバーも含め5人には結束が見られた
さつさと帰ったような表情バレットと不満丸出しの表情のタクリを
除けば彼らは正真正銘のチームだ！

…

次の日　　サブリミナ第一刑務所　　

ロッシ「ぐうう…私は何故こんな目に…くっ…くくく…

ならば”組織”のことも洗いざらい吐いて奴等も道連れだ

…」

????「なあにそれえ」

気づくとロッシの背後には少女が立っていた

ロッシ「なっ…誰だ貴様！一体どこから…」

???「武具をわざわざ貸し出してやったのにおじやんにするしい

素人能力者にボコられてムシヨぶちこまれるなんてえ

拳げ句私らのことをチクろうとするとはねえ」

ロツシ「貴様…組織の人間か…！わ、悪かったって、許せ

そ、そうだ、私から奴らスパイ共の情報を提供するから…」

組織の冷酷さを知っているロツシは

彼女が組織の人間だと分かると

助けを求め始めた

その声は看守たちにも響いた

看守A「なんだあ？なんか騒がしいぞ」

看守B「おいどうしたあ…えーと、ロツシ…ヒークロー…」

「ぎつぎやあああああああ…！」

その瞬間、巨大な爆発音と発光が起きた　ロツシの叫び声も

看守A「ッ…なんだおい！」

看守B「おいお前何を…」

…うッ…これは…」

次の瞬間、看守2人が見たものは

多分”人間だったもの”であろう肉片だけであつた
少女の姿も、そこにはなかった

5話 ワーストアウト（前書き）

うーん・・・伏線などをちりばめるタイミングがよくわかりません・

行き当たりばったりな小説になりつつある・・・

というわけで三個目のお話です、第一位デフラグ主役回・・・とも言える様な

5話 ワーストアウト

ミテイオライト高校 校庭

夕方4時を回り

ほとんどの生徒は帰宅か部活動である
しかしながら騒がしい数名が…

キヨシ「バレットさん急ぎましょうよ！みんな待ってますって！」

バレット「別に…あいつら（TKC）のところ行きたいなら一人で
行けば…」

ビオランテ「あん？どこに行くんだい？付いていつていい？？」

バレット「良いんじゃないの…」

なんの躊躇もなくTKC達の居るグループに友人のビオランテとア
ニークイを連れて行こうとしたバレットであったが
先を走っていたキヨシがくるっとターンしてバレットに近づき

キヨシ「駄目ですよ！これからはバレットさんと私のヒミツの時間
なんですから！-！」

バレット「うおっ…おいつ！」

そう言つとバレットの手を引きそそくさと走って行った

ビオランテ「あの2人…いつの間にあんな親密に…」

アニーケイ「仕方ないね…あんなだらしねえ奴らは放つといて炒飯でも食い行くぞ。奢るよ」

ビオランテ「フウツ―太っ腹ア」

そんな放課後を過ごしている中

邪気な表情を振り撒く銀髪の男が居た

彼はミティオライト高校の”ウィクトルナンバー” 第一位の デフラグ・ブルーバックである

デフラグ「つか…楽しく帰宅してたつてのに学校側から呼び出しとかマジで嫌になるわ」

どうやら彼は帰宅途中に学校から連絡をもらい
ミティオライト高校に戻っているらしい

デフラグ「ま…大した用じゃねえだろうけどな」

軽く溜め息を吐き

だらだらと歩いていると

前方から声がした

聞いたこともない女の子の声と

聞き覚えのある男の声…

その瞬間、ズン…と胸の奥が疼き

指先が震えだした

”奴”だ

「ほらバレットさん！早く早く！」

「急ぐなって…転んでも知らねーぞ」

第一位のこの俺を完全素人能力者の分際で叩き潰してくれたアイツだ

こっちに走って来やがる…

はっ…つか…あの金髪の女を守るだのなんだの言ってた癖に別の女とつるんでやがる…てか…てめえもそういう人種かよ…マジでよーし良いぜ…かかってこいよ…次は廃人コースに叩き送ってやるぜ…

「あっ、モンブランショコラムースパフェが期間限定割引って！買いましょバレットさん！」

「急いでんのか急いでないのかどっちだよ！」

しかしデフラグの予想とは裏腹に彼らにあっさりとスルーされた

デフラグ「あ…??」

なんだ？俺を覚えてないってのか？

ツ…てか、たった一回ぶん殴られただけで何をマジになってんだ…俺は

とりま、ああいう人種ってのは基本的にああいう馬鹿が多いからな

無視だ無視、無言の圧力だ
デフラグ「ん？」

RRRRRR!!

気が付くと電話が鳴っていた
番号を見ると「非通知」となっている
しかし彼は非通知からかかってくるのは慣れていた
第一位の座を欲しいとする能力者達が彼との決闘を望みあちこち
らから連絡を寄越すのだ

まあ、下駄箱に手紙置いていたりとアナログな奴も希には居るが
…まあ、それはまた前のお話

バレットという男に負けて以来はその数もめっきり減ったので
本人としてはそこは助かっているらしいが

デフラグ「まあた雑魚の挑戦状かよ…」

ピッ

????「よオ」

デフラグ「おお、どこでやるんだよ？決闘は」

????「おオ、流石第一位様だア話が早くて助かるわア」

デフラグ「てかこつちも用事があってなあ、アホみたいに時間は割
けねえぞ」

「???」あア、運動場の横の建設予定地で頼むわア」

デフラグ「（建設予定地って言うとは本校舎とは別に能力者に関する実験調査や参考資料とかを管理する施設を作るとかっていう…

つか…とりま俺には関係ねえか）」

デフラグ「いいぜ、首洗って待ってるウスラ馬鹿が」

そう言うのとデフラグは電話を切り
足早に建設予定地へと向かった

（建設予定地）

「???」よオ第一位イ、大分早かったなアおい

待ち合わせには遅刻しねエ紳士の鏡だなア助かるわア」

デフラグ「こんな散らかり尽くした所で決闘挑むとは…マジでろくな能力者じゃなさそうだなあ？」

周りを見るとクレーン車やタンクローリー

瓦礫や岩石、工事用具のマットクなどが大量にあり

いかにもな工事現場であつた

「???」おつといけねエ、自己紹介が遅れたな

俺の名は”パズラズ・バニツシュ”

学年はお前と同じ二年だぜ？」

デフラグ「はあ…てかどうせ明日には覚えてねえからつまんねー自

己紹介すんなよな…」

パズラズ「悲しい事言つなアおい、まアこっちは準備万端だからア…」

デフラグ「とりま喋ってねえでかかってこいよ馬鹿が」

パズラズ「その言葉ア！！後悔してくれんなよオ！？」

そう言うパズラズは目の前にある軽自動車に右手をかざした
すると爆発が起き、自動車は一直線に走りだし、デフラグに向かった

デフラグ「なるほどなあ、その手…爆発で車を走らせるって寸法かあ
でも遅え、果てしなく遅いんだよ」

あの自動車は確実に軌道に乗っている
デフラグの能力”デュアルブート”で安易に軌道を反らせられるはずだ

デフラグ「ゴッ…はッ…！？」

だがデフラグは攻撃を食らっていた…
その反動で吹き飛んだ

デフラグ「いつ…てえな…オイ…」

パズラズ「休んでる暇ア無エぞオ！！」

更に近くの自動車も爆発で発進させた

デフラグ「ちっ…油断してたか…そんなトロい攻撃反らすなんざ余

裕なン」

だが次の瞬間

デフラグはまたしても吹き飛ばされ
後ろのクレーン車に撃ち付けられた

デフラグ「ぐあ…！？」

何かがおかしい、デフラグは思った

確実に奴が進ませた自動車の軌道は読めていたし

確実に軌道は変えられたはず

しかし何故だか奴の攻撃は当たってしまふ

というのも”自動車よりも早く何かが自分に当たっている”という
感触なのだ

だが奴の能力は右手から発する衝撃爆弾のようなものはず
他の能力者が裏でサポートしている可能性もあるが、気配が一切感
じられないので違うだろう

デフラグ「ちツ…めんどくせえ…」

パズラス「おいおい…それでも1位かア？てめエはよオ

しつかしよくそんな雑魚と言ってもいい”軌道操作”な
んて力で1位の座を取れたなア」

デフラグ「喋ってる場合かよクソ野郎…

のたれ死ねクソがあああ！！」

するとデフラグは懐ふところから数本のボルトをばらまき

全てをパズラズへと向かわせた

パズラズ「へへへ…なんだよそりゃア…」

が、ボルトは全てパズラズに当たる事は無く
ガキンという音と共に弾かれ、落ちた

デフラグ「バリア…！？」

パズラズ「心の汚い愚か者には、魔法使いの胴着は見えませんか
たつてなア

そろそろ俺の本質に気付いてもいい頃だよなア」

デフラグ「見えない…だと…？？」

おいおいまさか、もしかしててめえの能力は…！！！！」

するとデフラグは近くに積んであったコンクリートの粉袋をナイフ
の軌道操作で開け

宙を舞った粉をまた軌道操作でこの建設予定地全域に覆い被せた
灰色の粉の雨…と言ったところだろう

パズラズ「ぶッ…何してくれてんだアおいトチ狂ったかよオ…あ…
？」

デフラグ「つまんねえ小細工してくれちゃってんじゃねーかよ…オ
イ…クッヒヒ…」

辺りを見回すと”さっきまで見えなかった物が”コンクリートの粉
を被り可視化できるようになっているのだ

パズラズ「あーバレたかア俺の能力の本質がア

俺の能力は”透明手腕〜ハンドレイサー〜”
簡単に言えば俺は手に触れた物を透明化させられるって
訳さ」

パズラズの前には粉を被ったフェンスがあつた
先ほどのデフラグの攻撃はこのフェンスで防がれていたのだ

デフラグ「はぁーん、なるほどな…とりま今までの攻撃もその能力を使った細工を施したつてわけか
何の細工も無い車の前に、”見えない車”をあらかじめ置いて発進させる…

そうすることで俺が能力を使うより早く自動車がぶち当たるつてわけか」

パズラズ「流石は第1位だア、物分かりが良いつてもんだぜエ
お前の能力は”見えない物”は軌道操作できないようだしなア、今回でよくわかったぜエ」

デフラグ「だがひとつ分からない事がある…お前が車を発進させるときに起きた爆発はどういうことだ？」

お前の能力は物を透明にできるつてだけだろうが」

パズラズ「ああ、それはこれだア」

するとパズラズは右手に持っている何かを見せつけた
小さい円盤のような形の物だった
一体それがなんなのかは全く分からないが、その疑問をぶつけるより先にパズラズは口を開いた

パズラズ「こいつは衝香炉しやうろうっていう道具らしくてなア

理論とかは忘れたが、窒素をどうにかして衝撃波を放てるってわけだア……」

デフラグ「つか……そんな道具聞いたことも無えな」

パズラズ「そろそろ1位の座は明け渡した方がいいんじゃないやアねエのか？この俺によオ

知ってるぜ？お前……発現して間もない能力者に負けたんだろ？

お前も分かってるんじゃないやねエのか？これから、お前より強い能力者はどんどん出てくるさ

世代交代の時が来たんだよ、古くて弱いお前がしつこく残ってたらこの高校のウィクトルナンバーも衰退しちゃうんだよオ」
デフラグ「てか……お前が俺に勝ったワケじゃねえだろうが……何威勢の良い言葉並べてくれてんだ？」

眉間にしわを寄せ、気に食わないという表情を見せるデフラグ

パズラズ「お前、あの日は元々女と戦っていて……勝ったと油断したところを例の炎の能力者に負かされたんだろオ？」

デフラグ「……」

パズラズ「でもなアンが変だよなア、ベテランで第一位に立ってる能力者が、横入りしてきただけのルーキーに負けるか？普通

俺は……本当の理由を知ってるぜエ……お前、女を庇う炎の能力者を自分の親に見立てちまったんじゃないやアねエのか？」

デフラグ「なに……！？」

パズラズ「学校にある生徒資料からお前の過去を探らせてもらったんだよ

お前は過去に能力者によって両親を殺されてる、そうだろう？

両親はお前を能力者から庇って死んだんだってなア…お前はあの日その風景が思い起こされて本気を出せなかった、そうだろう？」

デフラグ「つか何言ってるんだ…お前…」

パズラズ「笑えるよなア、高校の第一位を誇ってる能力者様がア、情けで手を出せませんでしたア、なんてよオ」

デフラグは肩を落とし、首も下に向け、何も言わなくなった
それを見て嘲笑^{あざわら}うパズラズ

彼は、デフラグを精神から追い詰めようとしているのだ

デフラグは 肩を震わせ

ただ

笑っていた

声を押し殺していたのか
やがて耐えきれなくなり

大笑いしたのだ

デフラグ「クヒヒヒハハハヒヒハハハハハ！」

パズラズ「なっ…」

決して正常ではない彼のリアクションに戸惑いを見せるパズラズ

デフラグ「つか、そんな学校側の用意してくれた綺麗事信じてくれる馬鹿が居るとかマジやべーよ！！」

まさかあ、俺がこうしてデカイ顔して歩いてるもんだから俺を”ホントは良い奴”だなんて思ってくれちゃったのかなあ！？」

パズラズ「はア…？な、何言ってるんだア？」

デフラグ「ああ…とりま…つまんねー小細工で俺をいらつかせてくれやがったし」

つまんねー長話で尺足んねーからよあ…もう終わりでいいかあ」

パズラズ「お前…分かってねーようだな…今、圧倒的に不利なのはお前の方なんだよオ」

デフラグ「俺の能力は二色配線（デュアルブート）…時速120km、重量96kg、距離にして半径10m範囲内であれば指定の物質の軌道进行操作可能」

パズラズ「はア？いきなりなんだア説明したからって能力が強くなるわけじゃアねえだろオが」

第一そんな子難しい事をペラペラと…単純に”そういう能力”ってだけでいいじゃアねエか

そういうのが苦痛にしかならねエ人間だって居るんだよ」

デフラグ「それはてめえが馬鹿だからだろうがよぉ!!」

デフラグが笑いと怒りの混じった形相でパズラズを睨み付けると

何故だかパズラズの周りは闇で包まれた

いや、正確に言えば漆黒、そう、視界が閉ざされたのだ

パズラズ「な…なんだアおいどうなってんだア!!」

何も見えず足元のドラム缶を蹴飛ばしてしまふ

無機質な「ガシャン」という音が

パズラズの不安感を煽る、冷や汗が滴り、足はすくんでいる

デフラグ「…以上は本質の応用でえ…」

俺の能力は分類上”精神干渉系”って奴でなあ

とりま…相手の脳にオーラ状のコードをぶっ刺して…”

視覚と聴力を自由に奪う能力”って奴なんだよな

ま、こんな技使ったら楽に勝てすぎてつまんねーから

”オーラ状のコードを刺す時に現れる僅かな物理的反応

”を利用してみたらそれが結構使えてなあ?

俺はその力…”軌道操作”を”二色配線デュアルブーツ

”として名乗ってたわけだ」

パズラズ「おっ…おいイ…んだよそりや…縛りプレイも良いとこだぜ…」

すくむ足でなんとか逃げ出そうとするパズラズであったが

完全に視力が無いため走り出すこともできない

よりにもよってここは工事現場…様々な工事道具や瓦礫は目の見えない状況で避けて進めるほど親切的な配置ではない

デフラグ「ま…こういう手加減つてのはほどほどにしとかなきゃな
ア…

たまたま悪い相手に当たって不意取られて殴られるなん
てもう御免だぜ…」

デフラグは周りの瓦礫を浮かせ
狙いをパズラズへ向ける

目が見えなくなれば聴力に全神経が集中する
パズラズにはその岩や鉄骨が浮かされる音が聞こえてしまった

パズラズ「お…おい冗談だぜ…分かったって…降参だ、降参、な…
俺の負けだつてエ」

デフラグ「お前の敗北なんざ一円の価値も無えよ…

つか降参つてのは見逃して貰う合言葉なんかじゃねえよ

なあ…

僕を八つ裂きにしてくださいっていつドM宣言だよなあ

ああああ!？」

そして激突する瓦礫の音と男の叫び声が響き渡る

彼がその後どうなったかは知らない

デフラグは用も済んだので校舎の方へと向かって行った

（ミティオライト高校…風紀委員室）

デフラグが扉を開けると

にこやかで優しそうな笑顔で出迎える職員が1人
他は誰もおらず、扉を閉め、この部屋に2人きりとなった

職員「やあ、よく来てくれたね、デュアルブート」

デフラグ「よあ…能力名で俺を呼ぶって事はまたヤバい話か」

職員「はは、まあここは防音設備が備わっているから、こういう相談をするにはぴったりなんだよ

でだ、今回君にやってほしいのは害虫駆除だ」

デフラグ「はッ…防音されてんなら隠語なんて使う必要ないだろうが」

職員「いやあつい癖でね…いつ誰が私を見ているか不安になることもあるのさ

ところで、先ほどどうやら君は一般市民まで”ワーストアウト”に墮落させたようだね」

デフラグ「あ？ああ、さっきの雑魚か」

職員「パズラズ・バニッシュ、ハンドレイサー

能力のレベル、操作精度はなかなか良い人間だったのに残念だ」

デフラグ「てか…”ワーストアウト”なんざこ洒落た言い方してくれるなあ

ただ廃人コース送りにしてやったってただだろうが」

職員「ふふ、君は無闇に人を殺したりしない

血を流さずに人間を奈落へ突き落とす

その魅力にひかれ私達は君を迎え入れたのだよ」

デフラグ「…つか…さっきソイツから聞いたんだがよ

俺の親が俺を庇って殺されたって、なんだありや

書いたのお前だろ」

職員「はは、即興で書いてみたよ、でもあの設定なら君は”不良”にはなっても”悪”にはならない

それとも何か？”ただム力ついたので突発的に両親を能力で殺しました”なんて真実を書くのが正解かね？”

デフラグ「てか俺はそれでも構わねえがな

そんな凶悪な奴を飼い慣らししてるなんて知れたら政府が黙ってねーぞ

確実に俺はブタ箱行きだ、今のご時世、少年法なんぞ存在しねーからな

お前らも困るだろ、こんな都合の良い暇なネズミ退治業者俺以外他に居ねーぞ」

職員「ネズミ退治業者とは、君も言うようになったな。ははは

はは、悪かった、この話は無しだ

単刀直入に言おうか、今回君に駆除してもらうのは”フォアルバア・クアットロ”という男だ」

デフラグ「へえ…知らねーな」

職員「彼は今とある施設に身を潜めている

だが彼はなかなか善_よからぬ事を企てているようなのでね

その施設に居る人間は彼も含め皆殺しにしてくれて構わない

…おっと」

職員は「一斉駆除と言いつつもりだったのに」という感情を抑えデフラグに事の詳細を話始めた

一方

「学校の地下部屋」

バレット「学校の地下にこんな広い部屋があるなんてなあ…」

キヨシ「最初に学校の外を走っていたのはなんだったんでしょうかね」

バレット「それはお前が待ち合わせ場所も聞かず勝手に飛び出すからだろ！」

キヨシ「バレットさんだって黙って付いてきたじゃないですか！」

バレット「別に俺はこいつらと関わりたくもねーんだよ！帰ろうとしてたの！」

彼が「こいつら」と称して呼んだのは

TKCとタクリ、メイカだ

TKC「ったく…夫婦漫才はそこまでにしとけよな」

タクリ「集場所ってのは日によって変わるからな」

こまめに連絡取らねーと駄目だってんだよ」

メイカ「き、今日は犬探しと子猫探しの仕事がありますからね…」

みんなで力を合わせましょう！」

バレット「まるで冴えない探偵事務所みたいな仕事内容だな…」

TKC「ハハハ、それでもケツを込めて頑張れば報酬だってあるんだぜ？」

彼ら五人が談笑していると

TKCの携帯が鳴り出した

数秒話すとTKCの表情は陰しくなった

TKC「名は…フォアルバア…クアットロ…ですか」

そして電話を切ると残り4人に向かい、言い放った

TKC「でかい仕事だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9873z/>

アビリティー・ウェイク

2012年1月5日20時54分発行